

発展問題

Ⅱ

- (1) ① イ ② ア ③ エ
 (2) 今年ばかりの春
 (3) イ
 (4) ① ウ ② イ ③ オ ④ ア

《解説》

- (2) この歌の後半の部分に注目して考えましょう。前半では、「いちちつの花」が強たくましくさいている情景を表現したうえで、作者は、この美しい花のさく春を楽しむことができるのは、今年が最後かもしれない、という自らの悲しみを表現しています。作者の正岡子規は長年病氣とたたかいながらすぐれた歌を多く残しており、この歌も病の中でよまれています。
- (3) かくしているつもりでも、恋心は顔色や様子にあらわれてしまうものだ、という意味です。そして、物思いをしているのかと人から言われてしまうくらいに、その恋心は強いものだということがよまれています。
- (4) イは、②の「ぞくけれ」の部分で強調しています。エはどの短歌にもあてはまりません。

2

- (1) ① ウ ② エ ③ ア ④ イ
 (2) 露しとしと柿の落ち葉深く
 (3) 夕焼け空・湖
 (4) 桜月夜
 (5) ウ
 (6) ① ア ② ウ ③ エ ④ イ

《解説》

- (1) 「小鳥」はわたり鳥のことを指すので、季節は秋がふさわしいことに注意しましょう。
- (2) ①の「よ」、②・⑤の「や」、⑥の「かな」がそれぞれ切れ字になっています。
- (4) 夕暮れになって、太陽が海に少しずつ情景が想像できます。最上川の河口近くから見える風景をよんだ句です。
- (5) アは「一羽の小鳥」が、イは「平然と見つめる」が、ウは「一年中見なれた」が、それぞれふさわしくありません。

4

- (1) ① 凍てて・冬
 ② 虫(の声)・秋
 ④ 名月・秋
 (2) けり
 (3) イ
 (4) (例) あたり一面、虫の美しい声がしており、水を捨てると鳴きやんでしまいそうだから。
 (5) ア
 (6) うさぎ

《解説》

- (1) ②の俳句では句の中心である「虫の声」が季語となります。「行水」(現在では夏の季語)とまちがえやすいのですが、この句がよまれた江戸時代では「行水」は季語ではありませんでした。このことが季語なのか迷ったときは、句の中心になっているものに注目するとよいでしょう。
- (2) 切れ字の代表的なものには「や」「かな」「けり」などがあります。切れ字は、俳句独特の表現技法として、中学入試などでも出題されることがあるので、忘れないようにしましょう。

《解説》

- (1) 季節や時間をあらわすことばに注目して、それぞれの短歌の情景をつかみましょう。④は「夜」とまちがえやすいのですが、夜が明けて朝に変わろうとしている「あかつき」のころの情景であることを読み取りましょう。
- (2) ふつうの文章と同じように考えて、意味のうえで区切ることでできる場所を探しましょう。①の短歌は「三句切れ」であることがわかります。
- (4) 「桜月夜」は作者の造語で、「桜」と「月夜」というともに美しいことばを重ねたロマンチックな表現となっています。
- (6) ②の「焦げきはわまれる」は作者独自の表現で、夕焼け空のイメージを強けつなものにしています。そして、それと対照的な冷たく静かな湖とを対比させていることから、ウがあてはまります。また、④の「まだ宵ながら明けぬるを」(夜だと思っているうちにあつというまに明けてしまった)は、夏の夜の短さを強調するためのややオーバーな表現で、イの説明があてはまります。「宵」は「夜(の初め)」のことです。

3

- (1) ① 蝶々・春
 ② かっこう・夏
 ③ ほとぎす・夏
 ④ 暑き日・夏
 ⑤ 秋の暮・秋
 ⑥ 小鳥・秋
 (2) 切れ字
 (3) ウ
 (4) ア
 (5) エ

《解説》

- (3) 「体言止め」は名詞(体言)の形で表現を終わらせることをいいます。②の句では、「虫の声」として名詞形になっています。
- (5) まだ冬だけれども少しあたたかい感じがする、春が近づいていることを感じさせる表現となっています。
- (6) 白いうさぎの姿が目にかぶような、絵画的な句といえます。月にはうさぎがすむという伝説をイメージさせる、げん想的なところもこの句のみ力のひとつといえます。